

未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

第3回 北前船が結ぶニシン漁とジャパンプルー「藍」

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

中島 宏一 (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



今回は、江戸時代から明治、大正、昭和時代と長きにわたり、北海道産業の柱を担ったニシン漁と、ニシン粕を肥料にした藍作に従事した徳島県人についてお話しします。

1 一大で財を成した青山留吉

旧青山家漁家住宅の主、青山留吉は山形県庄内地方の鮑海郡遊佐町の出身。江戸時代末期の安政年間、郷里の青塚の浜から小舟に乗って北を目指した留吉は小樽の祝津に来村しました。祝津でニシン刺網漁に従事しながら頭角を現し、1885(明治18)年には漁場を整備して主屋(住宅)を新築、さらに付属する文庫倉や石倉などを明治20年代に建築しました。主屋は1919(大正8)年に祝津を襲った大火で類焼を受け、建て替えられました。そして、明治時代半ば以降になると大規模な建網漁(定置網)に転向し、祝津と増毛にニシン漁場を数多く持ち、留吉は巨万の富を築いていきます。

1908(明治41)年、72歳になった留吉は祝津の漁場を二代政吉に譲り、遊佐に帰り隠居します。郷里に戻った留吉は、ニシン漁で得た富で多くの田畑を所有して豪農としてもその名を馳せ、村税の約80%を収めたほか、役場や学校の建設にも多額の資金を援助するなど、

郷土の名士として地域の発展に寄与しました。

開拓の村に移築復元した旧青山家漁家住宅は、大正8年に建てられた大きな主屋のほか、明治20年代に建築した文庫倉、石倉、板倉、米倉、そして祝津の手前の豊井漁場で使われていた網倉で構成されています。青山漁場で働く人々の暮らしぶりをより深く理解できる環境を創りあげるため、住まい以外に調度品や食材を保管する数々の倉も移築・復元しているほか、再現した廊下(船倉)と八雲町(旧熊石町)から移築・復元した旧土谷家はねだしを併せると、青山家が祝津に形成したニシン漁場全体が再現されているのがわかります。

2 祝津ニシン三大網元の遺構

青山家は、茨木家、白鳥家と共に「祝津ニシン三大網元」と呼ばれていました。茨木家は青山家と同郷で、札幌にも大規模な土地を所有していました。豊平と定山溪温泉を結ぶ定山溪鉄道が運行されていた頃、札幌市南区に「北茨木」という駅がありました。この駅名の由来は、駅周辺が茨木家の農場だったからです。1948(昭和23)年、小樽駅近くに進駐軍向けのビアホールとして開業し、その後は日本人も利用して賑わったキャバレー「現代」の建物は白鳥家の別宅を使っていました。1909(明治42)年に建てられた趣ある建物でしたが、惜しくも2012(平成24)年に取り壊されてしまいました。現在、その隣で店を開いている蕎麦屋「藪半」の一部に白鳥家の石蔵が使われているのはせめて



旧青山家漁家住宅

もの救いです。茨木、白鳥両家の主屋（番屋）は現在でも祝津で見ることができます。

3 旧青山家漁家住宅あれこれ

開拓の村に移築復元した青山家漁家住宅は、建築学的に見ても当時の青山家の人々の暮らしぶりを思い起こす上でも大変魅力的な建物です。その一部を紹介しましょう。

青山家の瓦は大正8年に再建された当初は、黒い色が特徴の福井県産若狭瓦を使っていました。なぜ、福井県の瓦を使っていたかは後でお話しましょう。開拓の村に復元した折は、耐寒性が高く吸水性が低い三州いぶし瓦（愛知県）を使っています。青山家の外観は大量の瓦を使った純和風の造りですが、主屋に入ると小屋組にはキングポストトラス構造^{*}を採用した洋風建築であることがわかります。ニシン漁場の主屋を北海道特有の「番屋建築」と呼び、この建築で洋風構造を採用しているのは青山家主屋の他には木村家番屋（石狩市浜益区）に見受けられます。

ニシン漁を経営する網元は東北方面から出稼ぎにきた漁夫たちをととても大切にし、彼らを「網子」と書いて「あご」と呼びました。その網子たちの命を守るのが「気圧計」です。天気予報がまだなかった時代、網元たちは気圧計で気圧の変化を測って天気を予想し、沖に船を出すか否かを決めていました。

4 旧青山別邸と郷里の重要文化財「旧青山本邸」

小樽市内に残る青山家の遺構として、現在は貴賓館と呼ばれている「旧青山別邸」が祝津の丘の上に建っています。この建物は、二代政吉が青塚の本邸の建築に携わった大工を棟梁に迎え1918（大正7）年に建築に取り掛かり、4年の歳月をかけて1922（同11）年に全18室の壮大な別荘として完成させました。別邸には麓の青山漁場の主屋から政吉の娘、政恵等が移り住み

ました。政恵が好きだった牡丹の花にちなみ、現在の別邸敷地内には牡丹や芍薬^{しやくやく}が植えられ、毎年5月下旬から6月には満開の花々が咲き誇ります。また、「北の美術館」と評されるほどに贅を尽くした建物の造りと調度品が来場者を魅了しています。

さて、別邸のモデルとなったのが留吉の郷里にある「旧青山本邸」です。2000（平成12）年、国の重要文化財に指定されたこの建物は留吉が51歳の時、祝津では漁場を建設している時にあたる1887（明治20）年に建築を開始しました、この頃の留吉は小樽と遊佐を頻繁に往来していました。そして1890（同23）年、庄内地方の屋敷に見られる茶の間・中の間・下座敷・上座敷と続く間取りを有する主要8室、412㎡の規模で、総瓦葺きの屋根の壮大な邸宅が完成しました。茅や石置き杉皮葺きの屋根が連なる漁村の青塚地区に突如として出現した瓦葺大屋根の建物には、地域の人々はさぞ驚いたことでしょう。さらに、室内の柱や長押^{ながおし}、差鴨居^{さかもい}などには春慶塗^{しゅんけいぬり}が施されました。こうした豪華な意匠は旧青山別邸と開拓の村の旧青山家漁家住宅の主屋に通じるものがあります。

5 北前船に乗ってニシン粕はどこへ

旧青山家漁家住宅の主屋の前にあるニシンの釜場。ニシンを煮る大きなニシン釜は寺の鐘と同じ鋳物製で、富山県高岡市で製造されたものが多く出回っていました。この釜にニシンを1,000尾ほど入れてグツグツ煮込んだ後、角胴に入れて水と油、そして粕に分けます。油は石鹼や灯火の燃料に、粕は田畑の肥料に使われます。旧青山家漁家住宅に「肥料製造営業」という札が掛かっているように、青山家ではニシン粕を製造していました。このニシン粕が巨大な富を生むことになります。

青山家など道内で生産されたニシン粕の大消費地は



青山家小屋組み



気圧計



旧青山本邸（山形県遊佐町）

^{*} キングポストトラス構造

三角形をつくって構造を構成するトラスのうち、中央に真束と呼ばれる支柱の立っている形式をいう。山形をなすトラスのほとんどがこの形式で、大規模な木造の建物などに利用されている。

現在の徳島県で、藍作の肥料として大変重宝されました。北陸地方の稲作地帯や関西地方の綿花栽培などの肥料にもニシン粕は使われましたが、徳島県内での消費は他府県を圧倒し、現地に開拓使の出張所が開設されたほどでした。ここで、藍作とニシンについてお話ししましょう。

藍は「肥喰い虫」と呼ばれるほどの多肥作物で、この藍作に不可欠な肥料が「其肥料ハ鯿粕ノ外ナキモノトセリ」（阿波藍譜）といわれるように北海道産のニシン粕でした。ニシン粕が肥料として流通し始めたのは、西廻り航路の整備とともに蝦夷地と本州方面との往来が活発化した1789（寛政元）年以降といわれます。

ニシン粕に商品価値を求めたのは近江商人でした。彼らは慶長年間（1596年～1615年）には行商人として蝦夷地で商いを行い、後年場所請負制度の成立とともにアイヌとの交易やニシン生産過程を抑え、無尽蔵に獲れるニシンを干鯿ほしにしんにして付加価値を高めました。その後、近江商人が蝦夷地で仕入れた産物を輸送するためにチャーターしていた船の乗組員が自前で商売をするようになります。すなわち、北陸地方の北前船主たちによる「北前船交易」の誕生です。高田屋嘉兵衛をはじめとする阿波商人が自前で船を仕立て、ニシン粕を買い付け始めたのもこの頃でした。嘉永年間（1848年～54年）には、蝦夷地のニシン粕は大坂や兵庫等の主要諸港に荷揚げされ始め、直接徳島の撫養港むやこうにも入るようになりました。

6 弁財船で石を運ぶ

北前船は通称で、先ほどお話した「西廻り航路」が航路名です。同航路は、1672（寛文12）年に江戸幕府が酒田（山形県）と大坂間に開設し、その後蝦夷地の松前方面に延長され、同地の産物が京畿地方に出回るようになりました。北前船と呼ばれたのは、瀬戸内地方に人が山陰や日本海側を「北前」と呼び、その方面

からやって来る船だから「北前船」と呼ぶようになったといわれています。

一方、この呼び名は日本海側にはなく、加賀では「ベサイ船」「千石船」、越前三国では「どうばらかき」、富山では「バイ船」、庄内鶴岡では綿や木綿布を積んで来る船なので「綿船」、北海道では「青タガ」「ベサイ船」と呼んでいました。「青タガ」とは、真新しい青いタガを巻いた酒樽を積んできたのでこのように呼びました。

北前船に使われた船を「弁財船」といいます。積荷は大坂方面の「上り」便ではそのほとんどが北海道産のニシンのメ粕や数の子、昆布など海産物でした。他方、北海道に向かう「下り」便では、大坂や瀬戸内、日本海の地域から酒類・塩・砂糖・米などの食料品、わら製品や鉄、木綿などが積み込まれました。弁財船の構造上、航海にはある程度重心を低くする必要があり、「下り」便の積荷が軽い時は、石材や陶器など焼物、瓦など重いものが積載されました。こうして現在、道内には北前船が運んできた西日本方面の文化が残っているわけですが、このお話は次の機会にご紹介しましょう。なお、私たちの身近にある北前船の遺構として、弁財船を停泊させていた「弁財澗」と呼ぶ入江が泊村に数か所確認することができます。

7 北海道に藍を広めた徳島県人

明治期以降、北海道に移住した徳島県人は全国12番目で、17,970戸（明治10年～昭和10年）を数えます。その先駆的な役割を果たしたのは、1871（明治4）年東静内（新ひだか町）に入植した旧徳島藩家老稲田邦植主従です。稲田家の元々の知行地は現在の徳島県馬場町にあり、幕末に海上防備の役割を担うために淡路島を加えて、同島にある洲本城城代となりました。戊辰戦争の行賞の件で徳島本藩と意見が分かれ内紛となる庚午事変こうごに発展し、稲田家は北海道移住、廃藩置県により淡路島は兵庫県に編入されました。



ニシン粕干し風景（「古平鯿漁十態」より）



国道229号線から見える弁財澗（泊村）

1871（明治4）年静内に入植した稲田家臣団第1陣は137戸546人で入植早々藍作を試作し、北海道における藍作発展の礎を築くことになりました。この移住団の中に、開拓の村に移築復元した旧武岡商店の創業者、武岡利吉・清吉父子がいました。

入植した人の苗字を村名にしたのは今の仁木町です。現在の徳島県吉野川市川島町出身の仁木竹吉は、1874（明治7）年に発生した吉野川大洪水による氾濫で、壊滅状態となっていた流域農民の救済を目的として移住を決意し、翌年北海道に渡りました。渡道後、開拓使の要請で開拓地を巡り、藍、麦、小豆などの栽培を入植者に指導しました。そして、1879（同12）年現在の余市郡余市川周辺で藍作に適した沃野を発見し、郷里の農民101戸361人と共に同地に入植しました。この地は、翌年に竹吉の功績を賞して「仁木村」と命名されました。

8 道内各地に藍を植える

ニシン粕の価格が高騰した明治10年代、生産コストを下げるために地場産業の藍作を北海道に持ち込み、肥料となるニシン粕を現地調達する動きも出てきました。徳島県人の阿部興人と滝本五郎（興人の実兄）らが1881（明治14）年に県内で設立した興産社は、同年、入植地を札幌郊外の篠路村に決め、翌年に郷里の板野郡や名東郡の農民と共に入植し、藍作を拡大していきました。現在、札幌市北区にある「あいの里」という地名は、阿部らがこの地で藍作を広げたことに因んで名づけられました。その後、阿部は衆議院議員を経て、北海道セメント、函館船渠、函樽鉄道、渡島水電などを経営し、滝本は蜂須賀農場相談役として同農場を開墾に大きな功績を残しました。滝本の子、阿部宇之八は現在の北海道新聞の前身である北海道毎日新聞を創刊したほか、宇之八の長男は旧北海タイムスが北海道新聞に統合されるまで社長を務め、三男は北

海道新聞社社長と北海道放送創設にあたり同社の初代社長を務めるなど、阿部一族は報道の第一線で活躍しました。

現在、日本で藍を栽培する農家一軒あたりで最大の作付面積を誇るのは北海道伊達市です。1884（明治17）年以降、静内における藍作は外国産の藍の流入で衰退しますが、1879（同12）年現在の伊達市に入植した宮城県出身の柴田意成、1881（同14）年に徳島県から49戸を率いて仁木村に入植し、後に伊達に移った鎌田新三郎らによって藍作は続けられ、現在に至ります。

9 旭川で藍染業、130年の歴史を刻む

開拓の村には、藍染業「旧近藤染舗」が移築復元されています。近藤家は吉野川流域の徳島県名西郡出身で、1894（明治27）年現在の篠津村に入植した後、1898（同31）年に旭川に移り、近藤染舗を創業しました。当時の旭川は1891（同24）年に屯田兵村が開設され、前後して近郊の永山と当麻にも兵村が開かれるなど町が形成され始め、さらに鉄道の開通や陸軍第7師団が札幌から旭川に移転してきたこともあり、都市として整備が進められていました。

創業時は、半てん、帆前掛け、商店の宣伝用ののぼり、第7師団入営時に掲げるのぼり、和服の無地染めや洗い張り（今でいうクリーニング）などを業務としていました。開拓の村に移築復元した建物は1913（大正2）年に建築された店舗兼住宅で、「御詠染物」と書かれた大きな看板と日除け暖簾に軒暖簾、内部には奥暖簾や紺色の半てんが掛かるなど、建物内外に近世の染物店の雰囲気の色濃く残ります。

近藤染舗は1950（昭和25）年に社名を「株式会社近藤染工場」に改称し、この年以降は船旗（大漁旗）を手掛けるなど業務を拡大して、現在、初代から数えて6代目となる阿部安弘氏が先祖代々の手染め技術を守る北海道最大の染物業を受け継いでいます。



稲田家臣団上陸地の碑（新ひだか町）
右上の丸い穴の先は淡路島を指している



旧近藤染舗